ネギま！　魔法先生ネギま！～最強無敵のチート降臨～

冒険ファンタジー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま！　魔法先生ネギま！～最強無敵のチート降臨～

【Ｎコード】
Ｎ７０６３Ｏ

【作者名】
冒険ファンタジー

【あらすじ】
創造神のミスによって死亡した剣崎桃也は元居た世界には戻れない為、詫びとして創造の力と不老不死と五つの能力を与えネギまの世界へと転生する。まったくの不定期の為時間が空いてしまいますのでご了承願います。

オリ主設定（前書き）

ラウルのプロフィールです。
何か思う所があったら、
助言お願いします。

オリ主設定

オリジナル主人公

＜名前＞

ラウル・クルセイド（男）１８歳

＜ホルホルの実で女性化時＞

メリネ・ハーベンライト（女）２０歳（魔法世界で変装時）

剣崎桃花（女）５～１５歳（麻帆良生徒として）

＜容姿＞

顔はマクロスＦの早乙女アルト風（女時はＴＯＲクレア風）

目は赤

（魔眼使用時では右目が勾玉文様（写輪眼）で左目が鳥模様（ギアス））

髪は銀髪で前髪はＦＦ？スコール風で腰辺りまでのロングヘアー

（女時の場合はＴＯＲクレア風ウェーブヘアー）

髪型は気分によって束ねたり、ポニーテールにしたりする

（女時はツインテールとか三つ編み等）

服装はＫＨシリーズ、リクと鎧テラとゼムナスの黒コート

コードギアス、ゼロとナイトオブセブン時のスザク等

（女時はテイルズシリーズ、エステルとジュディスとシェリアとシャーリィ等）

＜能力＞

創造の力（創造神からのサービス１）

頭に浮かんだ武器や鎧や服等を作る事が出来る（壊れても再生可）

作った人形に精霊や幽霊などを魂を込めれば人間になる

自身の体を変身・変化する事が出来る（悪魔の実の能力の範囲外の

み）

不老不死（創造神からのサービス２）
心臓や脳を攻撃されても死なない体になる（体全部灰になったら死ぬ）

ネギまでのステータス（創造神からのサービス３）
習えばネギまの魔法が使える（属性は全部使える）
始動キーはセル・ジル・ジルガ・ゼルセウス
体力・魔力・気力全てがナギ&ラカン以上
ネギ以上の天才的な考えを持つ事が出来る

テイルズシリーズ
全技と全術と全精霊が使える

ＦＦシリーズ（ディシディアとＫＨも含む）
全技と全魔法と全召喚獣（周りからは幻獣扱い）が使える

ワンピース
全キャラの技が使える
覇気を扱える
悪魔の実の能力全て使える
（オリジナルの悪魔の実も出します・カナヅチにならなくなる）

るろうに剣心
全キャラの技が使える

魔眼
右目がナルトの写輪眼がつかえる
左目がコードギアスのギアス（アニメ版全て）が使える（同じ相手

に何度でも使用可）

＜仮契約＞

テオドラとの仮契約（男の時に使用可能）
キョシンノヘイキ
アナザーセンチュリーズエピソードシリーズの
武器・兵装・オプション等が使える

ナギとの仮契約
リュウキシノツルギ
ダイの大冒険に出てくるオリハルコンの剣
剣に魔力を込めて鞘に納めて時間がたつと最大級の攻撃が可能
アバン流刀殺法が使える

エヴァとの仮契約（女の時に使用可能）
センジョウノウタヒメ
マクロスFの歌と歌唱力とマクロス7の歌エネルギーが備わる
シェリルの歌は前衛タイプ
ランカの歌は後衛タイプ
シェリル&ランカは両方のタイプ

プロローグ（前書き）

都合の良い展開になっていますが、
気にしないで下さい。お願いします。

プロローグ

俺の名前は剣崎桃也、高校三年生でそこらの平凡な凡人の筈だったが、
今は真っ白な空間の中でポツンとしています。

「ここ、どこだ？」

思わず呟いた言葉だった。

「すまん！」
「うわっ誰だ！？」

突然後ろから謝罪の言葉が聞こえて驚いて振り返った。
そこに居たのは三十代後半くらいの渋いオッサンがいた。

「申し訳ない、私のせいで君を死なせてしまって」

えっ？君を死なせてしまってってどういう事だ？
まさか俺って！？

「あの、もしかして俺死んだって事ですか？」
「そう、君は死んだのだ」

俺死んだ、おれしんだ、オレシンダって！？

「ちょ、ちょっと何でですか！？何で俺死ななくちゃいけないんですか！？」

俺は必至で目の前のオッサンに問い詰めた。

「実は、私のミスで・・・」

えっ、ミスってどういう事だ？

まさかこのオッサン！？

「私の手違いで君を死なせてしまった」

手違いでって！？

「ちょっとまて！？じゃあ何か、あんたのせいで俺は死んだのか！？」

「そうゆう事になるな」

「ふざけんなーーーー！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「少しは落ち着いたかね？」

「なんとかね・・」

正直納得はしていないけど、なってしまったからしょうがないと受け入れるしかない。

「それで死んだ俺をあの世へ連れて行くのか？」

「いや、君には別の世界で生きてもらう」

「えっ？別の世界って！？」

てっきり死んだらあの世に行くとばかり思っていた。

「こちらの不手際によって、本来ある筈の未来を奪ってしまったから、
その詫びがしたい」
「お詫びって、何か特殊な事でもしてくれるのか？」
「そうゆう事だな。君には私と同じ創造の力を与えよう！」
「創造の力って・・ん？」

私と同じ・・・って

「オッサン、あんた創造神なのか！？」
「まあな」

軽い返事が来たよ、マジで創造神なのか？

「それから創造の力と言っても物を作り出すのは構わないが、
命を作り出す事は出来ないからそのつもりで」

物を作り出す時点で十分すごい事なんですけど。

「次に、君を不老不死にする」

不老・・・不死！？

「ちょ、不老不死っていいんですか！？」
「ああ。君にはそれぐらいやらないと申し訳無いからね」

随分と気前いいなこの創造神のオッサン。

「それからこれから行く世界で生きていける様に、
その世界の強者より強くしよう」

いいのかよ？だんだん規格外の存在になってきてないか？

「最後に君の希望を五つだけ叶えよう」
「なんかもう突っ込みきれなくなってきたんだけど、
五つの希望かぁ」

そう言われても・・・そうだ、アニメやゲームでやってみたかった事
があったんだ。

「一つ目がテイルズシリーズの全技と全術、あと全精霊が使える用にと、
二つ目がＦＦシリーズ（ディシディアとＫＨも含む）の全技と全魔法と
全召喚獣が使える用にしてください！」
「了解した」
「三つめはワンピースの能力を全て使える様にしてください。あっもちろん
カナヅチにならない様にして下さい！」
「了解した」

えっと他にはっと、あっそうだ

「質問だけど、三つ目のやつって、創造の力でオリジナルの悪魔の実の
能力付け加える事って出来ますか？」
「ああ出来るよ」

やっぱ軽いな創造神のオッサン。
「四つ目はるろうに剣心の全キャラの技を使いたい！」
「了解した」
あと一つ何しようかな、やっぱ身を守るために必要な奴にしようかな？
あっそうだ！
「五つ目は魔眼を付けてくれ。出来れば右目がナルトの写輪眼で、左目がコードギアスのアニメ版ギアスでお願いします。あとギアスは制限無しでおねがいします！」
「了解した、それらの希望でよろしいかね？」
「これでお願いします」
「随分とチート的な能力がそろったな、次に容姿はどんな風がいいか？」
「見た目何しようかな？やっぱ美形がいいな、マクロスＦの早乙女アルト
っぽくして、それから銀髪ロン毛にしよう。あっ、前髪はＦＦ？のスコールの様にしよう。うんこれでＯＫ！」
「了解、次に君の新たな名前なんだが？」
「えっ名前を変えるんですか？」
「もしこれから行く世界で名前が横文字しかなく、一人だけ縦文字だったら
変だろ？」
まぁ、ある意味死んで転生する訳だから名前を変える必要はある

な。

じゃあ前から気に入ってる名前があるからそれにしよう。

「よし、今日から俺はラウル・クルセイドだ！」

「ではラウル君、最後に君の行く世界なのだが？」

創造神が十枚程の紙差し出して来た

「なんですかこれ？」

「どれか一つ選びたまえ、そこが君の行く世界だよ」

アバウトな選び方だな。

「え〜と、じゃあこれで」

俺は一枚引き抜いて、そこに行く世界の名前を見てみたら

「魔法先生・・・ネギま・・！？」

これって、子供先生が活躍する世界じゃないですか！？

本も全巻持ってるし、なんとかなるか。

「どうやら決まったようだね、では新しい世界に旅立つのだ！」

その瞬間、俺の足元に穴が空きそこに落ちた。

「わ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！？」

さてさて新たな世界でどうなる事やら。

原作から５００年前の世界！？（前書き）

ラウルが、今の自分に慣れる為に修行する編です。

原作から５００年前の世界！？

ただ今俺は落下中です。

「しかし、このまま落ちたら痛いだろうなって現実逃避してる場合じゃなかった。
こんな時は、そうだ」

俺は早速悪魔の実の、トリトリの実の能力で自身の体を隼に変身し、大空を飛んだ。

「ははっ、文字通り鳥になった。風が気持ちいい」

このまま当てもなく飛んで行こうと思った。

「さてと、この辺で降りてみよう」

その時、目の前に紙きれが浮いていた。
手に取って見ると「ラウル君へ」と書いてあった。
創造神のオッサンからだ。

「ラウル君、君がこれを読んでいるとゆう事は無事に辿り着いた様だね。
早速だが、今君は原作より５００年前の時代にいる。何故この時代かと言うと、
君の能力を把握してほしかったからである。不老不死だから寿命の事は気にしないで
いいからね。あっそうそう、不老不死と言っても、体が灰になるような事になったら

死んじゃうから気を付けてね。それじゃあ、第二の人生を楽しんできてね」

わざわざ注意事項までしてくれて、本当気前のいい創造神だったな。

「さて、自分はどんな事が出来るかな？」

それから数か月後・・・

だいたいの能力が分かった。

創造の力で自分の服装をＫＨ２のリク風にして、

武器は基本的に出し入れ自由だから問題無し。

主な武器は、ＦＦのバスターソードとガンブレードとナイフで、

るろ剣の逆刃刀と

日本刀と二刀小太刀と無限刃、テイルズの宙の戒典とデュランダル（意思無し）と

マテリアルブレード、ＫＨは全キーブレードと??機関の武器等にしてみた。

テイルズ＆ＦＦシリーズの技や魔法は問題無く使え、初級～中級は無詠唱で

発動できるが、上級魔法の場合は詠唱する必要がある。

悪魔の実の能力も全部使えるが一つづつしか使えないのが難点かな。

覇気も扱えた。

魔眼の方は、相手がいないと解らないから保留にしてと。

つーか改めて思うと、これらの能力って、チートとゆうよりバグキャラに近いな。

「よし、能力もだいだい把握出来たし・・・あ」

周りが環境破壊状態になっているので、創造の力で元に戻した。

「じゃ改めて、出ぱ「ドカーーーン！」ん！？なっなんだ！？」

急になにか破壊した爆音が聞こえた。

「行ってみよう」

俺は爆音が聞こえた方へと駈け出した。

助けた少女は吸血鬼！？（前書き）

コードギアスの名シーンを再現してみました。
突っ込むとこがあったら言って下さい。

助けた少女は吸血鬼！？

〜？？？サイド〜

「ハァ…ハァ……私とした事が油断した」

私の名は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。真祖の吸血鬼だ。

いつもの様に、私の首を狙っている自称正義の魔法使いと賞金稼ぎ。

まさか不死殺しの武器を用意してくるとは、左腕を攻撃されて千切れてしまった。

体にいたる所に攻撃されて、血が止まらない。

出血のせいか、躓いた。すぐそばに来ているのは、いかにも屈強そうな男が

立っていた。

「追い詰めたぞ。化け物め、死ねーーーーー！！」

私はこの時死を覚悟した、その時

「エル・トール！」

声が聞こえた途端、青白い閃光が目の前に居た男を飲み込んだ。

閃光が消えると、その男は感電したかの様な状態で立っていた。

「グハっ」

男は倒れた。周りいた魔法使いと賞金稼ぎの連中は浮足立ってた。

ふと声が聞こえた方を向いて見ると、全身黒尽くめ服とマントと

仮面を
付けた男が居た。

「大の大人達が寄ってたかって子供を殺そうとするな！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜ラウルサイド〜

俺は着ている服装をコードギアスのゼロの姿になり、スケスケの実の能力で透明化して、気配を絶ちながら爆音のあった場所に向かった。すると、片腕の無い血だらけの少女を追いかけている二〜三十人の男達がいた。俺はこの状況を見過ごす程の冷血漢じゃないので、あの少女を助けに行った。しかし、

あの少女どこかで見たような・・・

「おっと、あの子が殺されそうだ」

俺は直ぐに実体化してゴロゴロの実の能力で男を攻撃した。

「エル・トール！」

ふぅ〜、なんとか間に合った。

「グハっ」

周りに居る連中、明らかに警戒してるな。
だがお前達は、俺を怒らせた。
「大の大人達が寄ってたかって子供を殺そうとするな！」
と叫んだら、男が
「おい貴様、この化け物の仲間か！？」
俺はふとその少女を見ると、そうだ思いだした、この子エヴァンジェリンじゃないか！
原作キャラの子が何故ここに？あっ今原作から５００年前だから、この子が
吸血鬼化して１００年後だから辻褄が合うな。でも、
「事情はしらないが、目の前のこの状況で寄ってたかって子供を殺そうとする等と
恥ずかしく無いのか？」
そう答えると
「こいつは人間じゃねぇ、吸血鬼で化け物なんだよ」
ムカッ、こいつらは何を言っても平行線になりそうだな。
そうだこいつらに魔眼を試すいい機会になるな。
さっそく俺は、エヴァの前へと移動した。
「貴様達はどうあってもその子を殺すつもりなのか？」
「当たり前だろ！」
「なら貴様達に問う！相手を殺すと言う事は、自身が死んでもいい

と言う事か？」
「何を言っている？」
「解らんか？撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ！」
コードギアスのゼロの決め台詞を言った俺は、仮面の左目部分を開き、
ギアスが展開している左目見せた。そして・・・
「ゼロが命じる、貴様達は・・・死ね！」
絶対遵守のギアス発動！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜エヴァサイド〜
この仮面の男は一体何なんだ！？
私が吸血鬼だと知っても私を庇おうとしているのか、この男は！？
「貴様達はどうあってもその子を殺すつもりなのか？」
「当たり前だろ！」
「なら貴様達に問う！相手を殺すと言う事は、自身が死んでもいいと言う事か？」
「何を言っている？」
「解らんか？撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ！」
この男の質問にどこか納得した。私はいつも、私を殺そうとする連中を
殺して来た。
そんな私でも、さっき追い詰められた時は死の覚悟をした。

それの問いを奴らに教えようとしているのかこの男は？

「ゼロが命じる、貴様達は・・・」

ん？なんだ、この威圧感は！？

「死ね！」

いや、命令して素直に聞くと思うのか？こいつは。

「「「「「ワカリマシタ」」」」」

えっ？あいつら、何で自分の首にナイフ突き付けて、魔法使いの方は

隣同士で魔法を打つ構えをしているんだ！？まっまさか！？

その時男達は、首を掻っ切って大出血を起こし倒れ、魔法使い達は隣同士で魔法を放って互いに喰らっていき、最後は私と仮面の男以外

全員死に絶えた。

私は唖然としていた。この男が命令しただけで奴らは死んだ。

この男は一体何者なんだ！？

「大丈夫だったか？」

仮面の男が話しかけて来て、少しとまどってしまった。

すると仮面の男は、千切れた左腕を包むようにして、何か呟いていた。

そしたら、千切れた筈の左腕が生えてきた！？

私は驚愕した、不死殺しによって細胞が死んでいた筈なのに、次々と

私の体を治していった。
何故この男はここまでしてくれるのだろうと思い問い詰めた。
「おい貴様、何故私を助けた？」
そう言ったらこの男は
「誰かを助けるのに理由がいるのかい？例え吸血鬼だとしても目の前にいるのは、
ただの女の子にしか見えないよ」
と頭をなでながらやさしく答えてきて、私は思わずこの男に抱きつき、泣き出した。
「うわ～～～～～～～～ん」
吸血鬼化してから、もう人の温もりを味わう事は無いだろうと思っていた。
私を化け物としてしか見ていない連中が多くいた。
なのにこの男は私を人として見てくれる、それだけでも嬉しかった。

ラウルとエヴァ（前書き）

エヴァを助けてから、別れるまでの話です

ラウルとエヴァ

～ラウルサイド～

ギアス成功はしたが、俺は初めて人を殺したんだな、誰かを守るために

相手を殺した。

おっと、そうだエヴァの方は大丈夫かな？

「大丈夫だったか？」

って大丈夫じゃなさそうだな、血だらけで片腕無いし、

よし、創造の力でエヴァの体を治そう。

これでよし、エヴァの体は完治した。

すると突然エヴァが

「おい貴様、何故私を助けた？」

と言ってきたので、

「誰かを助けるのに理由がいるのかい？例え吸血鬼だとしても目の前にいるのは、

ただの女の子にしか見えないよ」

とＦＦ？のジタンっぽく気障な台詞を言いながらエヴァの頭をなでたら、

そしたらエヴァが

「うわ～～～～～～～ん」

泣きついてきたよ。ちょっと思考が飛んじゃったよ。
まぁ、命狙われる暮らしを強いられたから無理もないけどね。
その後、泣き疲れたエヴァは抱きついたまま眠った。
とりあえず、俺はゼロの姿からリクの服装に戻し、エヴァが起きるまでの間
食事の支度をしていた。
しばらくしてエヴァが起きてきた、若干顔が赤かったけど風邪ひいたのかな？

「落ち着いたかい？」
「・・誰！？」
「あっ素顔だから分からないか、さっき君を助けた仮面の男だよ」

あっエヴァちょっと驚いてるな

「まあ、なんだメシにしような」
「うん・・・」

ちょっと落ち込んでいるみたいだな？
よしこっちから自己紹介しよう。これで少しは打ち解けるだろう。

「そういや自己紹介してなかったな、俺はラウル・クルセイド。君は？」
「・・エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル・・」
「エヴァンジェリンか・・ちょっと長いからエヴァでいいかい？」
「・・・うん・・・」

まだ打ち解けるには時間かかるかもしれないな

「ねえラウル」
「ん、何だエヴァ」
「さっき、奴らになにしたの？」

まあ当然の疑問だよな。

「さっきのはギアスとゆう魔眼の一種で、この眼を見て命令されたら、皆俺の言う事
何でも聞くようになる、とゆう訳だ」
「魔眼だったのか通りで」

どこか納得したエヴァであった。
それからいろいろあって、エヴァと一緒に行動したり、魔法を習ったり、エヴァが
チャチャゼロを作ったり、ドラゴンと闘ったり、また賞金稼ぎやら自称正義の
魔法使いとか撃退していくうちに何故か賞金首になっていた。
ちなみにエヴァが、「闇の福音」「人形使い」「不死の魔法使い」「悪しき音信」
「禍音の使徒」等と呼ばれ、６００万の懸賞金が懸けられ、
俺はと言うと、「災厄の仮面魔導師」（無詠唱でばんばん撃ってるから）
「天変地異」（地震・雷・火事等を引き起こしたから）「吸血鬼の守護者」
（エヴァを守っているから）「不死の魔法使い」（不老不死だから）「狂喜の策略家」
（ルルーシュみたいに、作戦が成功する度に高笑いするから）「黒い支配者」
（ギアスで言いなりだから）等と呼ばれ、８００万の懸賞金が懸けられた。

エヴァの体を成長できると言ったら、すごい勢いで懇願してきたので、
ホルホルの能力で、見た目１５～６歳程にしてみたら「もう少し大きくしたかった」
と呟いていた。
そんなこんなで４００年以上が経っていた。えっ早すぎる？気にしないでください。
そろそろ原作に向けて行動した方がいいな。その為には、エヴァとはここで
別れるとしようか。

「なぁエヴァ」
「なんだラウル」
「俺はこれから別行動をとるから」
「はぁっ！何で！？」

うわっ、エヴァったら泣きそうな顔してるよ。
しかし、ここは心を鬼にして

「エヴァ、お前は強くなった、俺が居なくても充分生きてけるさ」
「嫌だ、私はラウルが居ないと駄目だ」
「ゴ主人、素ニナル程ラウルト離レタクネーミテェダナ」

なんかエヴァがすごくかわいく見える・・いや心を鬼にしないとつかチャチャゼロ、核心突くようなツッコミは控えてくれ。

「俺がいつまでも一緒じゃエヴァの心は成長しなくなるから、俺が居ない間に心を
成長させて、俺が戻った時に文字通り身も心も成長したエヴァの姿を俺に見せてくれ」

なんつー気障な台詞を吐いたんだ俺は・・

「キザッポイナ（ボソッ）」

言われなくても分かってるよチャチャゼロ。

「・・・分かった、ずっと待ってるから」

「ああ、分かった」

そして俺はエヴァの頬にキスしたら

「／／／／」

わ～顔真っ赤

「ゴ主人照レテル」

いちいちツッコミをするなチャチャゼロ。

でもやっぱ心配だな。あっそうだ

「俺から餞別代りにこれをやる」

俺は虚空からレインフォール（ＫＨＢアクアの初期装備）を取り出した

「こいつは魔力と癒しが込められている、杖代わりにも武器代わりにもなる剣だ。

もしまた不死殺しの武器を使ってきた時の為に使えば、細胞が生き返る様になる

優れ物だ」

不死殺し対策を込めたレインフォールをエヴァに渡した。

「／／私の・・・剣／／」

レインフォールを眺めているエヴァ

「イイナゴ主人、ラウルオレニモナンカクレ」

チャチャゼロが、羨ましそうに要求してきたから、フレッシュブリーズ

（ＫＨＢヴェントゥスの初期装備）を2個あげた。

嬉々として、フレッシュブリーズを振り回すチャチャゼロ。

さてと、それじゃ。

「じゃあエヴァ、またな」

「／／うん、またねラウル／／」

「ジャアナ、ラウル」

こうして俺はエヴァと別れ、魔法世界へと旅立った。

エヴァとラウル（前書き）

エヴァ側の心境です。

エヴァとラウル

～エヴァサイド～

それにしても、ラウルって最初女性かと思った。その事を言ったら「俺は男だ」

と言って思わず微笑んだ。

でも気になる事がある。

「ねえラウル」

「ん、何だエヴァ」

「さっき、奴らになにしたの？」

命令一つで自決させるなんてどうやればああなるんだ？

「さっきのはギアスとゆう魔眼の一種で、この眼を見て命令されたら、皆俺の言う事

何でも聞くようになる、とゆう訳だ」

「魔眼だったのか通りで」

ギアスか、聞いた事が無い魔眼だな。

それからいろいろあって、ラウルと一緒に行動したり、魔法を教えたり、

自分の従者としてチャチャゼロを作ったり、ドラゴンと闘ったり、また邪魔な

賞金稼ぎやら自称正義の魔法使いとか撃退していくうちにラウルも

賞金首になっていた。

ちなみに私が、「闇の福音」「人形使い」「不死の魔法使い」「悪しき音信」

「禍音の使徒」等と呼ばれ、６００万の懸賞金が懸けられ、
ラウルの方は、「災厄の仮面魔導師」「天変地異」「吸血鬼の守護者」
「不死の魔法使い」「狂喜の策略家」「黒い支配者」等と呼ばれ、８００万の
懸賞金が懸けられた。
ラウルが私の体を成長できると言ってきたから、思わず頼み倒した。その後、
ラウルの指先から針みたいなもので私を刺してきたら、本当に体が成長して、
見た目１５～６歳程にしてくれたけど、

「もう少し大きくしたかった」

と思わず呟いた。
そんなこんなで４００年以上が経っていた。えっ早すぎる？気にするな。
今日のラウルはなんだか思い詰めた顔をしているな。

「なぁエヴァ」
「なんだラウル」
「俺はこれから別行動をとるから」
「はぁっ！何で！？」

えっ？何で！？
そんなの嫌だ、そんなのいやだ、ソンナノイヤダ……

「エヴァ、お前は強くなった、俺が居なくても充分生きてけるさ」
「嫌だ、私はラウルが居ないと駄目だ」
「ゴ主人、素ニナル程ラウルト離レタクネーミテェダナ」

ラウルと離れたくない、ラウルと離れるなんてできない。
「俺がいつまでも一緒じゃエヴァの心は成長しなくなるから、俺が居ない間に
心を成長させて、俺が戻った時に文字通り身も心も成長したエヴァの姿を
俺に見せてくれ」
なんかチャチャゼロが、ラウルに何か突っ込んでる様にも見えたけど、
そんな事よりも、ラウルは私の事を思っての事なの……
「……分かった、ずっとまってるから」
「ああ、わかった」
そしてラウルはそっと私の頬にキスした
「／／／／」
ラ…ラウルにキ…キ…キスされた～～～～／／／／／／
「ご主人照レテル」
チャチャゼロうるさい。
「俺から餞別代りにこれをやる」
ラウルは何も無い所から珍しい形の剣を取り出した。

「こいつは魔力と癒しが込められている、杖代わりにも武器代わりにもなる剣だ。
もしまた不死殺しの武器を使ってきた時の為に使えば、細胞を生き返る様になる
優れ物だ」
「／／私の・・・剣／／」

ラウルが、私の為の剣をくれた。／／

「イイナゴ主人、ラウルオレニモナンカクレ」

チャチャゼロが、羨ましそうに要求していたのでラウルは、逆手用の武器を
二つを渡してた。
貰った武器を振り回してる喜んでいるチャチャゼロ。なんか複雑な気分だ。
名残惜しいが、ラウルと別れる。

「じゃあエヴァ、またな」
「／／うん、またねラウル／／」
「ジャアナ、ラウル」

こうしてラウルは私の元から離れ、旅立っていった。

紅き翼に入るつもりが帝国の騎士になった！？（前書き）

サブタイトルの通り、
最初はさり気無く紅き翼入るつもりだったが、
何の因果か、帝国側になった話です。

紅き翼に入るつもりが帝国の騎士になった！？

さて魔法世界に来たものの、紅き翼はどこかな～と。
ちなみに今の武器は逆刃刀。
当てもなくぶらぶらしてたら、近くに誰か来ていた
透明になって近づいて見ると

「むぐむぐ」
「ちょっと～、大人しくするんだな～」
「アニキ、これでオイラ達億万長者ですぜぃ～」
「おうよチビ、おいデブもっと丁寧に運べ、大事な金づるなんだからよ」

なんつーか、絵に描いた様な三下の小悪党って感じだな。あのデブが背負って、
アニキって奴が何か袋詰めにしてある物に向かって金づると言ってたって事は、
どこかのお嬢さんを誘拐して身代金を要求するって事だな。じゃさっそく。

「待ちな！」

透明化を解除して三人に呼び掛ける。

「なんだ嬢ちゃん、俺達は今急がｓ「誰がお嬢ちゃんだ！ゴムゴムのピストル！」
ブヘブォ！？」

人を女扱いにしてむかついたから、体をゴム化してアニキに向か

って殴りつけた。

「「あっアニキーー！！？」」

子分達の悲痛な叫びが響いた

「このアマぁ、よくもアニキを！？っつか腕伸びｔ「飛天御剣流」へ？」

俺は一気に間合いを詰め、チビの目の前まできて、逆刃刀を振り上げる

「龍翔閃！」

「フベァー！？」

チビは俺と一緒に空高く舞った

俺は見事に着地し、チビは地面に激突した。

つかこいつも、俺の事を女扱いしてたな。

「あ～チビまで～、ど・ど～しよ～！？」

俺はデブに詰め寄った。

「で、お前はどうしたい？二人の様に倒されるか？それとも持ってる物を置いて、

二人を連れて逃げるか？どちらか選べ！」

そう言ったら、直ぐに袋を置いて二人を連れて「ぴゅ～～～」と逃げて行った。

「さて、もう大丈夫だぞ」

ガソゴソ、バサッ

ん、褐色肌の角が生えた少女？綺麗な服を着て・・あっこれドレスか。

やっぱりどこかのお嬢みたいだな。怯えているせいかうずくまっているな。ん？

「むっ！？　やっと出れたのじゃぁー！！」

「ぐふぉあ！？」

少女が思いっきり飛び上がった為、俺の顔面に激突した。

主に角の部分で。

「ん？おお、すまぬ」

心が籠っていないよその謝罪……

「と…とにかく大丈夫かい？」

俺は顔を擦りながら言った。

「妾よりもお主の方が大丈夫か？」

君がやったんでしょ。

「ともかくお主のおかけで救われたのじゃ」

「まぁ、偶々目撃して助けた様なもんだから深くとらなくていいからね」

俺が笑顔で答えると、何故か照れた様な顔をしていないかこの少女？

「け：謙虚な事言うでない」

いろいろ思う所はあるけれど、とりあえずここを離れよう。

「まぁ何だ、いつまでもここに留まる訳にはいかないから、移動しようね」

「分かったのじゃ」

「じゃあ行くか…え～と、あっ俺ラウル、ラウル・クルセイドです。君は？」

そういえば自己紹介がまだだったな。

確か、自分から名乗るのが礼儀だったな。

「うむ！妾はヘラス帝国の第三皇女、テオドラじゃ！！」

えっ！？ヘラス帝国って確か紅き翼と敵対してたとこじゃん！！？

このままじゃ帝国側の人間として紅き翼と闘う事になっちまうって！！？

こうなりゃテオドラ皇女を送り届けてそのまま紅き翼探しに専念しよう。

うんそうしよう。

「どうした黙ってこんで、妾が皇女だからって遠慮する事は無い。楽にしていいぞ」

人の気も知らないで……

その後……近衛兵の所まで行きこのままさよならをしようと思

ったら、
是非お礼がしたいと言われ、断るに断れなかった俺であった。
俺ってお人好しなのかな？
ヘラス帝国に着いた俺たちは今、謁見の間へと連れて行かれた。
「お主が我が娘を助け出してくれたのか。本当にありがとう」
俺はヘラス帝国の皇帝から第三皇女を助けたことについてお礼を言われていた。
皇帝にお礼を言われている間俺は、ここから抜け出したい気持ちで一杯だった。
「君はどうやらかなり腕に覚えがある様だが、君さえ良ければ我が帝国の
客将として勤めてくれるか？」
やっぱ勧誘が来たよ。んで断ろうとしたら、テオドラが前に出て来て
「父上、どうせならラウルを、妾の騎士にして下され！」
ちょ！？ちょっとまて～～～～～～～～～～！！？
テオドラから爆弾発言により、俺はテオドラ皇女の騎士となってしまった。
もうここまで来てしまったら、もう引き返せないじゃないか～～～～！！？
騎士になってしまったので、もう割り切るしか無いと自分に言い聞かせた。
テオドラからは「テオで構わぬ」と言ってくれた。
テオから仮契約してくれと頼まれ、契約したら何と、Ａ．Ｃ．Ｅ．

に出てくる
兵器が使えるアーティファクト（名はキョシンノヘイキ）だった。
ちなみに騎士となっている間の装備は、ＫＨＢの鎧テラで、主にガイアベイン・
ロストメモリー・ウェイトゥザドーン・??機関全武器・バスターソード・
ガンブレード・日本刀等を使用。
さてさてなんだか帝国と連合の方も戦争が活発になって行き、いよいよ
戦場へと駆り出された。

「ラウル、ここから先がもう戦場になっている。必ず生きて戻ってくるのじゃぞ！」

言われなくても分かっているよ。あっそうだ。

「テオ、俺は今からラウルじゃなく、君の騎士として戦いに赴く為に、
騎士としての名前を与えてくれないか？」
「妾の騎士としての名か！？」

ちょっと照れた顔で悩んでいるな。
もっとも思い付かなかったら、ＫＨＢのテラにするつもりだけどね。
今の鎧姿もテラがモデルだし。

「よし決めたのじゃ！」

あ、決まったのか。変な名前じゃありません様に。

「妾のテオドラの名前から取って、テラと名乗るがいい！」
まさかの偶然の一致、テオもテラと考えたのかのは素直に驚きだ！
「テラ……よし、今から俺の……いや私の名は、テオドラ皇女の騎士テラだ！」
「うむ、ではテラよ、妾達に勝利を捧げるのじゃ！」

こうして私はヘラス帝国の騎士として戦場へと駈け出した。
ちなみにこの時の戦いは、帝国側の勝利（主に私一人の成果で）となった。
極光剣とピカピカの能力とライオンハート等で戦った事から「極光の騎士」
と呼ばれたり、
悪魔の実の能力を駆使して戦った姿から「変幻自在」とか、
写輪眼や極近未来予知のギアス（もしくは、思考を読むギアス）やマントラで相手の動きを常に先読みする事から「先見の騎士」とか、
色んな武器を作って使う姿から「武器生産工場」とか、
飛天御剣流で戦う振る舞いから「剣豪騎士」とか、
テイルズの精霊やＦＦの幻獣を従えている姿から「精霊と幻獣使い」とか、
アーティファクトでコードギアス蜃気楼の『絶対守護領域』とＦＦの
『マイティガード』とタテタテの能力（オリ実、一度盾を展開しても、
他の能力が使える）とカベカベの能力（オリ実、一度見えない壁を展開しても、
他の能力が使える）とテイルズのフォースフィールド等で障壁を何重にも

展開する事から「帝国最強の守護騎士」等が呼ばれた。
余談だが、連合からは「自然を操る魔人」（ロギアで）「鬼才な策略家」
（ルルーシュっぽく）「機械天使」（アーティファクトで、）「化け物騎士」
（強すぎるから）「つか、殴っても切っても効かないんだけど」
（六式的に）
等と恐れられた。

紅き翼に入るつもりが帝国の騎士になった！？（後書き）

前半の部分の、三下雑魚キャラの名前見て
ピンと来た人は居ると思いますが、
出来れば見逃して下さい。
次回は紅き翼と戦う前の話、テオとの一日話
「外伝１テオドラの暇つぶし」です。

外伝1テオドラの暇つぶし（前書き）

今回はテオドラ視点で送らせてもらいます。

外伝1テオドラの暇つぶし

あ～暇じゃ、ラウルは戦場に行ったきりじゃし、
退屈で死にそうなのじゃ。
妾は暇なのじゃ～、暇なのじゃ～……

「テオ、ただいま！」

！？ラウルが戻ってきた！？

「ラウル！？、お主戦場の方はどうなったのじゃ！？」
「俺が居なくても、今回の戦いはこっちが勝つから姫様の相手をして来て下さい。
って言われた」
「そっ！？そうか」

気を利かせてもらったのかの。

「妾は暇をもてあそんでおるのじゃ、だから…ラウルぅ～一緒に遊ぶのじゃ～」
「そうだな」

するとラウルは、少し考えていた。
そして、

「テオ、テオの好きな動物は何？」

いきなりなんじゃその質問は？
まぁ、強いて言うなら

「猫じゃ！」

と言ったら、ラウルの体が変化しよった。

「！！？らっラウル！？？」

「にゃ～／／」

小猫になったラウルが、にゃ～と照れそうに鳴いている姿に、気を失いそうじゃった。

「かわいいのじゃ～」

妾は思わず、小猫になったラウルを抱き上げてナデナデした。

猫ラウルも気持ち良さそうにごろごろと鳴いた。

「他にもなれるかの？」

「モチロンにゃ、にゃにかリクエストはにゃいかにゃ？」

はぅ～、猫っぽい語尾で話しかけてきておる～。

「犬はどうかの？」

「一度元に戻って、変身！」

ラウルの体が元に戻ったら、また変化したのじゃ。

「わんっ！」

「おおっ！これはまたっ！」

かわゆいのぅ～。ナデナデ

「他にもあるけど、順番に変身していくから、気に入ったのがあったら言ってね？」

そう言ってラウルは、象やキリンや大きな鳥やペガサスやら、果ては

ドラゴンにもなるなど、次々と変身していった。

それで妾は、一つやってみたい事を思い付いた。

「ラウル、ドラゴンになって帝国の空を飛んで欲しいのじゃ」

「テオがいいんならいいよ」

ラウルは、小型のドラゴンになり、妾を乗せて大空を飛んだ。

「わ～、高いのじゃ～」

「あんまりはしゃがないでくれよ、人を乗せるの初めてなんだから」

「ラ～ウルと一緒に、お空の散歩～、ん」

目の前には、古龍の龍樹がいた。相変わらず大きいの～。

するとラウルは

「ちょっと体大きくしますね」

対抗心なのか、龍樹くらいに大きくなったドラゴンラウル。

そしたら龍樹が近寄って来た。

「ええっっ！！？？」

ラウルがかなり驚いている。

「どうしたのじゃ、ラウル？」
「何故か龍樹が、「素敵な人ー！私と付き合ってー！」って言って、こっちに
近寄って来るんだけど！？？」
「な、なんじゃとー！！？？」

あれからラウルは、龍樹のアプローチから逃げ続けて、小型化してようやく難を逃れた。

それからしばらく帝国の空を飛んでいき、妾は十分満足したのじゃ。

「ラウル、また今度空の散歩に付き合って欲しいのじゃ」
「いいよテオ」

今度はなにで飛んでってもらうかのぅ。

外伝1テオドラの暇つぶし（後書き）

ちなみに、今回変身したのは
ネコネコの実、モデル・ペルシャ（オリ種）＋ＦＦ魔法ミニマム
イヌイヌの実、モデル・シェパード（オリ種）
ゾウゾウの実、
ウスウシの実、モデル・麒麟
トリトリの実、モデル・鷹
ウマウマの実（幻獣種）、モデル・天馬
ドラドラの実（古代種）、モデル・飛龍（オリ実）＋ＴＯＤＰＳ版
　晶術ビッグ等でした。
次回はいよいよ紅き翼登場。
「紅き翼と極光の騎士」です。

紅き翼と極光の騎士（前書き）

いよいよ紅き翼とバトルです。
すみません間違えました。
正確にはバトル前でした。

紅き翼と極光の騎士

〜？？？サイド〜

俺の名はナギ・スプリングフィールド。
最強の魔法使い！……の予定の男だ。
俺達「紅き翼」は連合と一緒に帝国と戦っている。
俺の仲間を紹介するんだが、めんどいからパスして
「「「「紹介（しろ。しろよ。してください。するのじゃ）」」」」
総ツッコミを喰らったので、紹介する。メンド。
まず、黒髪眼鏡が神鳴流剣士の詠春。
次に、いつも笑顔面してるのが、アルビレオ・イマ。
んでもって、ジジイ口調のちびっ子が、ゼクト師匠
最後に、この筋肉ダルマが、俺と引き分けたジャック・ラカンだ。
今俺らは、帝国の連中が破竹の勢いでオスティアまで攻めてきたので、
連合の助っ人として戦い、オスティア防衛戦では連合の勝利となった所だ。
するとアルが、
「……どうやら、この戦場に「極光の騎士」は居ない様ですね」
？……「極光の騎士」？
「アル、何だその「極光の騎士」ってのは？」
俺はアルに質問をした。

「帝国がこうしてグレートブリッジを落とし、オスティアまで攻められる様に
なった原因とも言える騎士の事です！」
「あの「剣豪騎士」とも呼ばれてる？」

詠春が言った。

「ワシも聞いた事がある。「変幻自在」・「精霊と幻獣使い」・
「帝国最強の守護騎士」等と呼ばれる程の凄腕だとか？」
「俺も聞いたことあるぜ。なんでも連合から「自然を操る魔人」とか、
「鬼才な策略家」とか、「機械天使」とか、「化け物騎士」とか、
「つか、殴っても切っても効かないんだけど」とか言われてたな？」
「へー、そんなに強えーのか？その「極光の騎士」ってのは？」

俺は興味本位で聞いてみたら

「強いなんてもんじゃありませんよ。なんせたった一人でグレートブリッジを
一時間たらずで制圧したのですから」

「「「「なっ！？」」」」

マ、マジかよ！？俺らだってグレートブリッジを制圧するのに三時間近くかかるぞ　？！

「今回の戦いでは、帝国の勝利目前だった為居ませんでしたが、次の戦いで現れる
可能性があります。もし、出て来たら……私達全員で挑んでも、大苦戦になるのは

間違い無いでしょうね」

おいおい、そんなすごそうなのが帝国に居るってのか！？

そんな奴……そんな奴がいたら……

「戦ってみてーじゃねーか！」

「オウよっ」

「「「……」」」

俺は、その「極光の騎士」と戦ってみたいと思った。

ジャックも同意した。

他の連中は呆れた様な顔をしていた。

「……ああ、やっぱりナギはナギだ……珍しく真面目だと思ったらこれだ……」

「フフフフ、言うと思いました。やはり期待を裏切りませんね」

「馬鹿の極みじゃのぅ」

「なんなんだよ三人とも、どーゆう意味だ！」

こいつら好き放題言いやがって、

「んな事より、さっさと帝国の連中を追っ払って、そいつを引きずり出すぞ！！」

ジャックも「極光の騎士」と戦いたがっているので、急ごうとする。

つーか、「極光の騎士」を倒すのは俺だぞ！

「さて、「紅き翼」出撃します！！！」

いやアル、なに仕切ってんだよ。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～ラウルサイド～

俺は今、グレートブリッジで帝国と一緒に連合軍と戦ってます。
最近の俺は帝国にとって勝利の存在とも言われ、
連合側は悪魔が蹂躙される思いになる程の存在になった。
帝国サイド
「テラさんだ、この戦い勝てるぞ！」とか、
「皆の者、テラ殿に続けー！」とか、
「テラ様は、帝国の希望だ（よ）！」と言われてる。
連合サイド
「魔人テラだー！皆、奴から離れろー！」とか、
「なんで当たらねぇ、動きが読まれている様だ!?」とか、
「精霊や幻獣を従えてるぞ!?皆逃げろーー!!?」とか、
「終わりだ、奴の光から逃げられねぇ!?」等と言われてる。
これまでチート的な流れ進んで来たが、多分そろそろ現れる頃だと思う。
未来の英雄「紅き翼」が。
今のまま、彼らと接触すれば、十中八九戦いになるだろう。
つーか、ナギとラカンてかなりの好戦的だから、合った時に殺し合いが
始まる予感がビンビン来てます。
とりあえず俺はと言うと、苦戦している所を探して応援に行かないと。
なんか、帝国の兵達がすれ違う度に「ご武運を」「帝国に勝利を」「テラさん、お気を付けて」等と、帝国の兵達から絶大な信頼を寄せてるみたいだ。

戦闘中なのに皆から激励を貰うなんて、こりゃ頑張らないと。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜紅き翼サイド〜

「オラオラオラオラーー！！」

ジャックのアーティファクト「千の顔を持つ英雄」で、
沢山の剣を投げ付けた。

「負けてられっかー！『来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ
南洋の風……』」

ナギも負けじと呪文詠唱をする。

「『雷の暴風』！！」

ドカーーーン！！
ジャックのアーティファクトとナギの魔法でほとんどの敵を打ち
倒した。

「いやはや、あの二人が居ると、戦闘が楽ですね〜」

アルが呟き、

「まったく、後先考えず突き進み追って」

ゼクトがぼやき、

「本当に頭の痛くなるな、あの二人は」

詠春がなげく。

そんなこんなで、グレートブリッジの半分を制した所、

「よっしゃー、このまま突き進んd「『静寂の森に眠れし氷姫よ…』」！？」

ナギは、一瞬身震いをした。

今突き進んだらまずい！？

「『彼の者に手向けの抱擁を』！」

「やべー、皆下がれ！！」

ナギ達は、勢い良く下がった。

次の瞬間、

「『インブレイスエンド』！！」

ナギ達が向かおうとした所に、巨大な氷塊が出来た。

「（危ねー、あのまま突っ込んでたら氷漬けになってたぜ。）」

内心冷や汗をかいた。

「今のは『こおるせかい』か？にしては呪文が違う様に聞こえた様な？」

師匠でも解らない魔法の類なのか！？これ。

「良くかわしたな」
「「「「「「！！？」」」」」」

氷塊が砕けた後、そこには鎧の男がいた。
その姿は、全身鎧で覆われていて、マントを羽織り、手には少し変わった形を
した剣を持っていた。
まさか、あいつが噂の「極光の騎士」か！？

「あの男、かなり出来るぞ！」
「うむ、只者では無いからのぅ」

詠春と師匠が慎重になり、警戒している。

「彼に纏う魔力は測り切れませんね」

アルも珍しく警戒してる。
私も警戒はしますよと返して来た、こんな時に心読むなよ。

「へっ！ようやく現れたか！」

ジャックが嬉しそうに言った。
するとあの騎士が、負傷した帝国の兵達に「大丈夫か？」と治癒魔法を
かけていた。

「ほぅ、味方を大事にするタイプの様ですね」

とアルは呟いた。
そして、あの騎士がこっちに向き、一歩前に出て剣を地面に突き

刺した。
「我が名はテラ、ヘラス帝国第三皇女テオドラ殿下に仕えし騎士なり！！」

と名乗った。

「貴行らが、連合軍最強集団『紅き翼』であるか？」
「へっそうだ、今からテメーを倒す最強の集団『紅き翼』だ！！」

俺は、胸張って答えた。
するとテラは、

「ならばその最強の集団を、これ以上進ませはしない！！」

テラは突き刺さった剣を取り、臨戦態勢をとった。

「行くぜーお前ら！！」
「「「オゥ！！」」」

俺達は、テラに戦いを挑んだ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

遂にこの時が来ちまった。
紅き翼との対決の時が。
とりあえず、ここに来る前に『マイティガード、シャープネス、ブレイズエミッター、アスティオン、バリアブルヘキサ、レジスト・ヴィレ、
アクアプロテクション、コンセントレート、スペル・エンハンス、

マイトチャージ、ファランクス等を自分に掛け（内心掛け過ぎだろと思ってる）、
写輪眼・思考読み・先見・マントラを展開しつつ、
あいつらの出方を見るとしよう。

「先手必勝っ！」

あれはジャック・ラカン、！！？剣で切りかかると見せかけて投げてくる！？

「そーらよっ！」

俺は、先見のギアスとマントラで相手の行動を読み取り、回避しようとしたが、
後ろには負傷した兵達が居る為、避けたら被害に逢うから、なんとか受け止めよう
と思った。
そしたら、本当に受け止める事が出来た（しかも左手だけで）。

「おっすげーな」

内心驚いた。
小手調べ（三割程本気）で投げた剣を、あろう事か片手で受け止めるなんて。

「なかなかの力だ。なるほど、兵達では荷が重すぎる訳か」

そう言って受け止めた剣を落とす。受け止めた時の感触が今でも残っているので、
そうとう力が込められている（多分ラカンは適当に投げた）と思

う。

「良く言うぜ。あっさり受け止めたくせによぅ。」

平静を保っちゃいるが、俺は少し冷や汗をかいている。

ジャックの攻撃を平然と受け止めるたぁ、やっぱ強ぇーな「極光の騎士」！！

どうやら「極光の騎士」も、相当なバグキャラの様ですね。

やはりあの騎士、出来る。

奴を倒すには、かなり骨が折れそうじゃな。

上からラカン、ナギ、アル、詠春、ゼクトの五人はそれぞれ、

テラに対しての感想を思った。

「だが、この程度では私は倒せんぞ！！」

テラは、ワザと挑発する様な発言をした。

すると、

「フン、上等じゃねーか！！」

ナギは、より一層燃えた。

「まっ待てナギ、うかつに戦えば相手の思うツボだぞ」

詠春は慎重になり、ナギに忠告をする。

なにやら作戦会議を始めた様だ。調度いい、一対一でも一対五でも、

こちらがちょっと不利になるから、戦力を分散させよう。

その為には、

「まずは、小手調べだ。『元素の根源たる精霊達よ、我が力となれ』！

『清れんよりいでし水煙の乙女よ』！
『山海を流浪する天の使者よ』！
『気高き母なる大地のしもべよ』！
『灼熱の業火を纏う紅の巨人よ』！」

上から順に、水の精霊ウンディーネ、風の精霊シルフ（三姉妹）、地の精霊ノーム、
火の精霊イフリートを召喚したテラ。

『御主人様、お呼びしましたか？』
『お呼びでしょうか主殿？』『呼んだか主！』『な～に～？』
『な～に～ご主人、なにかよ～う？』
『契約者よ、何用か？』

それぞれが質問してきた。
前に使った時は、『『『『用も無いのに呼ぶな』』』』と怒られたので、
しばらくは使わなかったけど、今なら。

「『契約者の名において命ず、我が眼前に居る敵を倒せ』！！」

『分かりました、御主人様！』
『了解しました、主殿！』『よっしゃ！まかせろ！』『は～い』
『了解なんだな～！』
『了解した！』

「なっなんだありゃ！？」

「恐らく精霊を召喚したのでしょうね」
「うむ、さすが「精霊と幻獣使い」、その名は伊達では無いのぅ」

ジャックが驚き、アルとゼクトが説明した。
すると、アル・詠春・ゼクト達が前に出て、

「まずは、私達が精霊達と戦いますから、ナギとジャックは「極光の騎士」
の相手をお願いします！」
「「りょ～解！！」」

よし、これで戦力は分散した。向こうは精霊達に任せて、
ナギとラカンの戦いに専念しよう。

こうして、アル・詠春・ゼクトＶＳウンディーネ・シルフ三姉妹・ノーム・
イフリートで、ナギ＆ジャックＶＳテラの戦いが始まった。

紅き翼と極光の騎士（後書き）

さぁいよいよ紅き翼とのバトルです。
テラ（ラウル）のアーティファクトが炸裂する。
次回
紅き翼ＶＳ極光の騎士
英雄達の戦いが今始まる。

紅き翼ＶＳ極光の騎士（前書き）

ようやく紅き翼との対決の時です。
精霊達の戦いはネタが最初しか無かったので、
省略しちゃいました。

紅き翼ＶＳ極光の騎士

～アル・詠春・ゼクトＶＳ精霊，Ｓ～

帝国と連合、両陣営が硬直状態になって、紅き翼とテラと精霊達の戦いを固唾を飲んで見守っている中、アルが動く。

「まずは、そちらのお嬢さん方」

アルがシルフ三姉妹に向かって、手元にある物を渡そうとしていた。

「このゴスロリ服を着てみませんか？」

と真顔で交渉（？）するアル。

詠春とゼクト、両陣営も一緒に「ズテーン！」と音を立ててずっこけた。

残った精霊達も唖然として、アルを見ていた。

するとシルフ達は

『あの、これから戦闘を始めるんですが、宜しいですか？』

真面目に答える長女のセフィー。

『誰が着るかーーー！！』

顔を真っ赤にして拒否する次女のユーティス。

『えっいいんですか～、一度着てみたかったの～』

着る気満々な末っ子のフィアレス。

『『フィアレス！！』』

当然二人の姉は、フィアレスを注意する。

『あぅ～、遠慮します～、グスン』

残念そうにしているフィアレス。

「そうですか、残念です」

「アル……、これからって時に、良くそうゆうのが出来るな……」

「まったくじゃ…」

詠春とゼクトは復活してツッコんだ。

「では気を取り直して……始めましょう」

ようやく戦いを始めた。

「詠春、今回はあなたの剣術が要です」

「分かっている。神鳴流が通じるかどうかは微妙だが、このままやられる訳にはいかない」

詠春が気合を入れる。

ここからは省略してナギ&ラカンVSテラに進みます。

「「「『『『『『『えーーーーーーーー！！？？？』』』』』』」」」

」

～～～

～ナギ&ラカンVSテラサイド～

キンッ！ドカッ！バキッ！カン！
二対一だってのに、こいつ全然余裕じゃねーか！
「その程度か紅き翼？『魔神剣』！」
剣圧を飛ばしてきやがった。
「まだまだ、『獅子戦吼、秋沙雨、虎牙破斬、閃空裂破、風雷神剣』！！」
くそう、なんつー技の猛攻だ。
ナギは、防ぎながら考えてると、
「ナギ、どけーーーーーー！！」
「！！？」
ジャックがアーティファクトを投げつけながら、突進して来た。
投げた剣はまさに、剣の雨と化す程降ってきてるが、テラの奴あろう事か、
体に突き刺さった勢いで後ろへと突き抜けた筈なのに、ぴんぴんしてやがる。
違和感を感じたジャックがそのまま殴りつけようとしたその時、違和感に気付いた。
殴られた奴の体は、まるで体から光が飛び散った用に見えた。

「なっ！？どうなってやがんだ！！？」

さすがのジャックも驚いた。

するとテラは、

「無駄だ、私の体は如何なる攻撃を受け流す」

攻撃が効かなければ、魔法で倒すしかねぇ！

「『来たれ、虚空の雷、なぎ払え』！」

テラがジャックに気を取られてる間に呪文を完成させる。

テラがこっちに気付いた。

「まずい」

「テメーは喰らってろ」

慌てたテラが防御しようとしたら、ジャックに阻まれて体制を崩す。

「喰らえ、『雷の斧』！！！」

俺の得意とする超広範囲雷撃殲滅魔法を奴にぶつけた。

「どーだ。ザマーみやがれ！」

俺とジャックは勝った……その時、

「『八尺瓊勾玉』！」

「「！！？」」

煙の中から、いくつも光が飛んで来た。

「なんだこりゃ、光の矢か！？」

「いや、魔法の射手じゃねぇ、どうなってやがんだ！？」

俺の『雷の斧』をものともしないなんて、なんて奴だ。

でも、だからこそおもしれえ！

ふう危なかった、生身のままだったら、確実にまずかった。

とっさに雷人間化してやり過ごした。やっぱりナギすげー。

次はこっちの番だ。

俺は光人間になり、親指と人差し指で輪を作り、無数の光弾を放った。

「なかなかやるな、サウザンドマスター」

「へっ、おまえもな」

いくつか喰らった後があるな。

俺は、持っているガイアベインをしまい、呪文を唱える

「次は、こちらから行くぞ、『光よ、邪悪を滅ぼす槍と化せ』！」

俺は、光の槍を取りだした。

「喰らえ、ホーリーｒ「『斬魔剣』」なに！？グアッ！？」

横から剣圧を飛ばした物により、直撃した。

「大丈夫か？ナギ！？」
「え…詠春！？」

驚いた事に、精霊達を撃退した詠春・アル・ゼクトが戻ってきた。

「なかなか手強かったですよ」
「思ってたより、苦戦したがの」
「アル…お師匠も」
「紅き翼勢ぞろい、という訳か」

俺達はテラに向けて、応戦体制を取った。

「五対一では少々分が悪いな、こちらは切り札を出すとしよう」
「「「「「！！？」」」」」

あれはパクティオーカード！？まっまずい。

「アデアット（キョシンノヘイキ）！！」

俺のアーティファクトを展開させた。
背中のマントが消え、機械の翼（ストライクフリーダムの機動兵装ウイング・
ドラグーン付き）が生え、右腕は鉄の腕（紅蓮可翔式の徹甲砲撃右腕部、
掌には排撃貝）、左腕には赤と白の厚い小手と大剣（太陽アクエリオンの左腕、
デスティニーのアロンダイトビームソード）、頭部には宝玉突き兜（蜃気楼の頭部）を装着した。

「「「なんだありゃー！？」」」

「随分とごてごてした感じアーティファクトですね」
「アンバランスじゃのう」
紅き翼のそれぞれの感想を言った。
「行くぞ」
！？来る
機械の翼を広げ、突進してくる。そして、左手に持つ大剣で切りかかった。
すぐさまジャックが、斬艦剣で切りかかるが、拮抗してるのか火花を
散らしているだけになった。
「おいおいなんだその剣は！？俺の斬艦剣で折れないなんて」
「剣だけではないがな」
「おもしれー、もういっちょ『斬艦剣』！！」
再度俺は、『斬艦剣』が振り下ろす瞬間、奴は俺の懐に居た。
『斬艦剣』が振り下ろされる瞬間俺は、体感時間停止のギアスを発動し、
周りが停止した。
直ぐにラカンに近づき、右腕をラカンの腹に付けて時間が来るのを待った。
すると時が動き出す。
「……なっ！？？いつの間に！！？」
「喰らえ！」
「くっ！？気合防御！！」

「リジェクトー！！」

ドン！！！と音を立てて、ジャックは少し後ろへと耐えながら吹っ飛ぶ。

するとしばらくしてジャックは、大量の血を吐いた。

「ブファァァァッッ！！？？？」

「「ジャック！！？」」

「ブファッ、な…なんだ今の一撃は！？体の中から爆発したみてえだ！？」

「あの右腕、とてつもなくやばいのぅ」

「バグキャラのジャックを一撃で、やはり相手もバグキャラの様ですね」

「とにかく、あの右腕は厄介だな！」

「固まってていいのか？」

「「「「「！？」」」」」

奴は、右腕を前に出して来た。

「いかん！？、ナギ・アル、障壁を張れ！！」

ゼクトの指示で障壁を張った紅き翼。

「広範囲、輻射波動ーー！！」

正式名、徹甲砲撃右腕部・拡散を放ったテラ。

熱風が紅き翼を襲う。

「あちちちっ！？なんだよこの熱風！？」

「とにかく防げ、何としても防ぐのじゃ！！」

輻射波動を防ぐのに背一杯な紅き翼だったが、一人だけ動いた者がいた。

「斬空閃・改！！」

「何！？」

徹甲砲撃右腕部が破壊され、熱線も治まる。

「う…うまくいった」

「ナイス！詠春」

「やってくれるな」

テラは剣を持ち変えて、左手を打つ姿勢を取った。

「喰らえ、無限……」

嫌な予感がした私は、直ぐに防御しようとしたら、

「パーーーーーーンチッ！！」

すると左手が伸びて来た。

私は喰らってしまい、どんどん後ろの方へと下がって行く。

「そのまま地の果てまで吹き飛ｂ「ヌウリャーッ！！」なに！？」

ジャックが伸びた左腕を破壊した。

「あまりに隙だらけだったんでな、壊しといた」

良し、これで奴の両腕部分は使えなくなった。
このまま、一気に畳み掛ける。

「一斉攻撃だ」
「「「オウ」」」

三人は返事をした後、攻撃を開始した。

「ひっさーつ！ラカンパーーーーンチ！！」
「『魔法の射手・５７３９矢』！！」
「（重力を作り出して、テラへと落とす）」
「『百重千重と重なりて、走れよ稲妻、千の雷』！！」

ドカーーーーーーン！！！と音を立てて粉塵が舞う。

「こ…これだけやれば……ハァ…ハァ…いくら奴でも」
「さすがに、疲れたのぅ」
「ですが、まだ油断はできませんよ」
「おーい、皆ぁ」
「詠春、遅せーよ今頃来たのか？」
「連合の駐屯地まで飛ばされたから、ここまで来るのに時間がかかったんだよ」
「まぁいずれにせよ、奴は……！！？はっ！？」

ナギは、爆煙が舞う所を見た。
その瞬間、青い何かが飛んでて、光の弾を撃って来た。
とっさに障壁を張って警戒する。
爆煙が晴れると、さっきの青い何かが周りに浮いてて、腕をクロスして、
赤い障壁を張ったテラが立っていた。

「おいおい、あれだけやっといてまだ居んのかよ」
ジャックは呆れた様な顔をしていた。
するとテラは、
「ふぅー、危なかった」
とっさに『絶対守護領域』と『スーパードラグーン』を発動してた。
「へっ、まだやれるみてーだな！続きをやろーぜ！！」
こっちは引けねーからよ、それにまだまだやりてーしな。
「よかろう、相手n！？ちょっと待て！」
「「「「「？？」」」」」
あれは通信魔法か！？
「悪いが勝負はお預けだ！」
「はぁっ！？なんでだよ！？」
「アベアット」
テラのアーティファクトが消えた。
「たった今連絡があった。連合の別働隊がこちらの本陣を襲撃しているとの
情報がきた」

なんだよそれ！？？そんな話きいてねーぞ？
つーか、後ろに居た筈の帝国の兵が、何時の間にか居ねぇ！？

「やられたよ、まさか君達赤き翼がオトリだったとは、俺を君達に
ぶつけて
時間稼ぎをしてたという事か」
「ちょっと待て、俺らだってそんな話聞いてねーって」
「だが事実として、内の本陣が襲撃されているんだ、私は直ぐにで
も撤退の準備に
向かわなきゃ行けない」

テラは、黒い空間を作った。

「まてよ、次は絶対勝ってやるからな！」
「その時が来たらな。また逢おう」

そう言ってテラは、黒い空間へと行ってしまった。

くそ、こっちは五人がかりだってのに、テラの奴、全然本気を出
していなかったな。
まあいい、宣言通り次は、ぜってーに勝ってやるぜー！！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜テラサイド〜

ふぅ、うまくいったな。これで、次の伏線が出来たな。
それにしても、「次は絶対に勝つ！」か、俺って、ナギのライバ
ルに
なっちまったみたいだな。

「おっと、ボサッとしてる場合じゃなかった。早く撤退の準備に行かないと」

そう言って俺は闇の回廊を走って行った。

紅き翼VS極光の騎士（後書き）

ちょっとぐだぐだ感が出てる感じになっちゃいました。
次回は
結成！白の騎士団！
サブタイトルを見て、ピンと来た人多数いると思います。

結成！白の騎士団！（前書き）

白の騎士団にオリ主てんこ盛りです。
容姿は他を作品を参照。

結成！白の騎士団！

今俺は、鎧（兜無し）状態のまま、与えられた部屋で悩んでいた。
やっぱ手強いな紅き翼は、いくらチートな能力とアーティファクトがあるからって、数の
暴力には敵わないだろうか？
こりゃ手札の量増やさないといけないな。あっそうだ。
急いで俺は、テオと皇帝陛下に頼んでみよう。

「「直属の兵が欲しい？」」
「はい、先の戦いで紅き翼と一戦交えた私は、驚いた事に私と互角に戦える程の者が居る事が発覚し、紅き翼に対して対策を取ろうとしても、一人だけでは荷が重いのは必然となります。そこで、単刀直入に言えば、帝国の兵達の中で選りすぐられた者達を、我が配下にして、紅き翼に立ち向かいたいとの事です！」

しばらく皇帝は悩んだが、テオが、

「うむ、我が騎士ならそれぐらいの気構えをしても罰は当たらん！」

と豪語し、許可してくれた。

「では、私の補佐をする者と実力のある者を、計４～５人程お願いしたいのですが？」
「ん！？４～５人だけで良いのか？」
「数が多い方が勝つとは限らず、少数精鋭で挑んだ方が何かあった時の為に、対処出来ると思う。後の事は、私が鍛えていけば良い」

また皇帝は悩んだ。そして、

「分かった、こちらから実力のある者をリストアップするから、選抜は君が行ってくれたまえ」
「分かりました」

それから2～3日が経って、皇帝から俺の補佐になる者が出来たと使いが来た。
謁見の間へ行くと、皇帝の傍に騎士甲冑をした女性が居た。
この人、ＴＯＶのソディアにそっくりじゃん！

「おおラウル君待っとったぞ、彼女の名はシルヴィー・ベルヴァーン、君の補佐をする事となった」
「シルヴィーです。私の様な者が、隊長の補佐を任される事になりました。
まだ若輩者ですが、よろしくお願いします！」

シルヴィーが礼儀良く挨拶してくれた。何だか背中が痒くなるなぁ。
性格もちょっとお堅い様子。でも、こうゆう子ほど任せられる感があるなぁ。

「ああ、こちらこそよろしく。私はラウル・クルセイド。鎧を着ている間は、テラと呼んでくれ」
「はっはい！ありがとうございます！」

この後、隊長補佐兼副隊長となったシルヴィーに、アースシェイカー（ＫＨＢテラの初期
装備）を進呈したら、涙を流しながら俺に忠誠の誓いを立ててくれた。

そんなこんなで、集まったのはシルヴィーを含めて、４人となった。
メンバーは加入した順で言うと（シルヴィーの事も兼ねて）、
シルヴィー・ベルヴァーン（ＴＯＶのソディア似）
かなり真面目でちょっと御堅い魔法剣士タイプ。俺の事をかなり信用してて、同時に
憧れの存在にしている。俺の騎士隊副隊長兼俺の補佐。

バルト・デット（ＴＯＳのゼロス似）
二枚目系で魔法剣士タイプ。最初は俺の事を女性だと思って、プロポーズされたが、
男だと言ったら驚いてた。けっこう軟派男らしい。最近はシルヴィーにアプローチしている。

ディバル・ガドメル（ＴＯＴのフォレスト似）
体が大きめの戦士タイプ。武人精神を持っている為、修行や鍛錬は欠かさずこなしている。気の類の物は扱える。

メルフィレア・シエル（スーパーロボット大戦ＯＧのラトゥーニ似）
愛称はメルで女性の魔法使いタイプ。少し大人しめで引っ込み思案だが、戦いになると
と意外と肝が据わる。

尚、騎士のメンバーは白い鎧をメインにしています。

「精鋭となる者が、４人も集まれば充分かな？」

「それで隊長、我らの所属する名は何にすればよろしいですか？」
「それならもう決めている」

俺は皆に向けて、宣言した。

「ヘラス帝国、独立遊撃騎士隊。通称「白の騎士団」！！」

こうして白の騎士団の面々は、俺の指導の下で着実とレベルアップして行き、
一人で百人くらい相手に出来るぐらいまで戦える様になった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜紅き翼サイド〜

最近帝国側で、テラが率いる少数精鋭の騎士隊が連合の進撃を阻止しまくっている
為、グレート・ブ　リッジを奪還出来ても、なかなか帝国の方へと近づけないでいる。
「くそーテラだけでも厄介なのに、白の騎士団なんてのが出て来てから、連合側は足踏み状態じゃねーか！」
数日後、ナギ達は今、戦痕が癒えていないグレート・ブリッジを見渡せる場所にいる。
ナギはそんなグレート＝ブリッジを見ながら呟いた。
「俺の故郷がある旧世界じゃ、超強力な科学爆弾が発明されてて、こんな大戦はもう起こらねぇそうだ。戦を始めたが最後、みんな纏めて滅ぶだろうからだってよ」

「ナギが珍しく理知的な事をいってますね「うるせアル！」」

アルの呟きに、ナギが突っこむ。

「だが、こっちのこの戦はいつ終わる？　帝都へラスまで攻め滅ぼすってか？」

ナギはそこで仲間の方に振り返った。

「やる気になりゃ、この世界にだって、旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。こんなこと続けてどうなる？　意味ねぇぜッ！！　まるで・・・」

「――まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだ――ですか？」

この場にいる皆はアルの言葉を聞いて真剣な表情を作った（ジャックは興味なさ気）。

「――――ある意味、その通りかも知れないぞ」

「ガトウ」

突然響いた声の主の名前をナギが代表して言った。

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ」

そこでガトウは一端、声を切った。

「やはり奴らは帝国・連合、双方の中枢にまで入り込んでいる。・・・・・・・秘密結社「完全なる世界」だ」

さらに数日後、彼等紅き翼はガトウに呼ばれて本国の首都にいた。
「何だよガトウ。俺達をわざわざ本国首都まで呼び出してさ」
「あってほしい人がいる。協力者だ」
「協力者？」
ナギ達はその言葉を聞いて、少しだけ真剣な表情に変えた。
「そうだ」
声が聞こえた方へ振り向くと、そこには　驚きの人物だった。
「「マクギル元老院議員！」」
ナギと詠春はつい声に出して驚いた。しかし、そんな彼等にマクギル元老院議員は手を振った。
「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ……」
「（なら来るなよ、紛らわしい）」
マクギル元老院議員の言葉にナギはそんな事を思った。
そして、彼等は主賓が来るであろう方向、マクギル元老院議員が来た方向を向いた。
その方向から靴音を鳴らしながらフードを被った、一人の女性が来た。
その女性を見ながらマクギル元老院議員は言葉を続けた。
「ウェスペルタティア王国・・・アリカ王女」
近くに来た事によって見られる王女…アリカ・アナルキア・エン

テオフュシアの顔を見てナギは、

「……」

どこか惚けた様な顔をしていた。ちなみにジャックはウホ顔をしていた。

～～～

ＯＨベリルのティエール
（杖の出し入れ、追加魔法　（テイルズ魔法可）付き）を進呈した。
尚、シルヴィーにも勧めたが、前にあげたアースシェイカーがお気に入りの為、断られ
た。

「さてお前達、この前教えた「六式」体術はどこまで憶えた？」
俺は前に、紅き翼と渡り合える様な技を考えてたら、六式を思い付いたので、それを
皆に修行にさせた。
驚いた事に皆、剃・紙絵・月歩を数日で取得していた。

「俺は剃・紙絵・嵐脚・月歩を憶えた！」
バルトは鉄塊と指銃は会得できなかったが、まずまずの出来だ。

「私は、全て扱える様になりました！」
すっげ、ディバルの奴、六式全部使えるのかよ。これは流石に驚いた。

「私は、・・・剃と・・・紙絵と・・・月歩の三つです」
まぁでも、メルは魔法使いだし、そのぐらい扱えれば充分だろぅ。

「私は、鉄塊以外は使用可能になりました」
アイヴィーはなかなかだけど、全部って訳じゃないみたいだな。

皆ここまで強くなったな、これなら紅き翼ともまともに戦えるかも・・・ってそーじゃない

だろ！

いつの間にか最強の騎士になって行く俺の部下達を見て、当初の目的を思い出して

いた。

紅き翼と一緒に世界を救うという目的があるのに、なんかどんどん離れてってる気が

する。

結成！白の騎士団！（後書き）

内容どうしようかと悩んでは結構日が経っちゃって、少々スランプ気味です。
次回は
「裏切り者への粛清と新たなオリ敵」
白の騎士団のあいつが、そして新たな敵とは？

裏切り者への粛清と新たなオリ敵（前書き）

一部無理やりの部分もありますが、
まあ見てって下さい。

裏切り者への粛清と新たなオリ敵

～テラサイド～

俺は今、最近帝国内で怪しいと言われる執政官のストーカ…ゴホンッゴホンッ、尾行
をしています（もちろんスケスケの能力で透明化しながら気配絶ちして、ってなんだか
パターンになって来ている様な？）。
そしたら驚くべき事に「完全なる世界」との繋がりがある人物と密会していた。
俺は直ぐにＦＦ？のスフィア盤を使って、この状況を録画していた。
皇帝にこの情報を教えたら、頭を抱えてしまっていた。側近とも言える存在が
戦争を食い物にしている「完全なる世界」の配下に居た事に嘆いていた。
しばらくして、執政官は逮捕され、俺の方は更に英雄視され、警備の時町に行くとたく
さんのファンに囲まれて、もみくちゃになる程慕われた。

「ふぅ、なんか町でも城の中でも注目されているな」
「それはそうなのじゃ、連合をものともせぬ騎士隊隊長が、裏で暗躍していた執政官を逮捕したのは、帝国の希望とも言える妾の騎士様なのじゃからの」
テオは嬉しそうに俺を評判を言った。
確かに、「完全なる世界」との繋がりのある執政官は逮捕されたが、もう一人あの場

に居て、フードを被っていた為性別が分からなかった、捕える事が出来たのは執政官
だけで、もう一人は逃げられた。帝国に裏切り者が居る事は分かっているが、肝心の
正体が分からなかった。
仕方が無い、奥の手を使うか。

「思考読みのギアス、展開！」

これで俺は原作の宮崎のどかのような読唇術士になり、見回りながら通り過ぎる人達
の心の声を聞いていた。

「（あっラウル様だ）」
「（綺麗な人、本当に男性？）」
「（この際、男でもいいかな？）」
「（ちっ、テオドラ様の騎士が）」
「（くそ、あいつが来た所為で俺の出番ねーじゃねーか！）」
「（フン、化け物騎士のお通りかよ）」

等と、慕う者や若干危ない者や嫉妬している者が通り過ぎている。
その時、

「（極光の騎士め、我ら「完全なる世界」の邪魔をして！）」

ビンゴ！俺はいつもの様に透明化しながら気配絶ちして、声の聞こえる方へと近づい
た。

「（幸いな事に、奴のすぐそばまでいるから何時でも始末できる）」

俺の事を甘く見ているのかと思って覗いて見ると、

「（何せ、奴は私に・・・・・・）」

なっ！？？な：なんで・・・・・・あいつが、もう一人の裏切り者！！？？

俺はあいつの話を盗み聞きした後、急いでテオと皇帝の所に行きあいつについての

話し合いが始まった。

「まさか……あやつが……執政官と同じく、帝国の裏切り者じゃったとは」

「すまないラウル君、裏切り者を君の部下にしてしまうとは」

「いえ、陛下せいじゃありません、それにこの話は皆には黙っていただきたい」

「なんじゃと、裏切り者が傍におるのに放っておけと！？」

「そうじゃない、あいつは今は白の騎士団のメンバーです、ケジメは俺達白の騎士団に任せて下さい！」

「……うむ分かった、あやつの事はラウル君、君に任せるとしよう」

「はい！」

「ところで、騎士たちに任すと言うと？」

「はい、あいつ以外の皆には言っておくつもりです。もちろんその時が来るまでは手出しさせない様にします」

それから、俺達は事の内容を皆に教えた、そしたら皆「あいつを捕まえよう」と言って

来たが、なんとか制した、

あいつを罠に嵌める為にはどうしたら良いかと悩み、しばらくし

て俺は思い付き、テオ
と皇帝の所に行き、対策を伝えた。

数日後、時刻は夕方頃、白の騎士団はある森林地帯に居た。ちなみに今の恰好は鎧
テラになっています。

「いいか皆、今日はこの周辺に怪しい人物の目撃情報が入った。これより森の中を散策する！怪しいと思う場所に行き、余裕があれば各自で対処したり、皆を読んだりするように。では、3人2人で分けて散策しよう、・・・は私と一緒に来い、残りの皆で散策してくれ」

俺ともう一人は一緒に散策していたが、思考読みのギアスを発動させ、相手の様子を
窺った。

「（ふふっ、丁度良い事に奴は一人だ。ここで始末する！）」

殺気を感じ、俺は撃って来た魔法をリフレクで跳ね返した。

「なっ、何！？」
「ようやく尻尾を出したな・・・」

俺は一呼吸して、魔法を放った相手に言い放った。

「裏切り者、「メルフィレア・シエル」！」
「くっ！」

そう、数日前に聞いた声の主はメルだった。

あの時の話の続きはこうだ。

「（何せ、奴は私に特殊な体術と武器を教えてくれたのだからな、本当は全部出来るのだがな。おまけに聞いた事が無いが、新たな魔法を教えてくれるとはな。これならアーウェルンクス様のお役に立てるわね）」

「（おいおい、フェイトの名前が出たって事は、やっぱりメルは「完全なる世界」のスパイと言う事か。つーか六式全部使えるのかよ！しかしこの先の展開が分かんねーな、俺が介入して来たから補正がかかっているのかな？）」

とまぁ俺の心境の話は関係無いので飛ばして、この後の話は上記にあるので、話を
戻しましょう。

「何故、私が裏切り者だと分かった！？」

「お前は、他の皆と比べて黒い物があったからだ。それだけだ！」

「そんな根拠の無い不確かな事で私の正体がばれるとはな」

本当は思考読みのギアスで盗み聞きしてただけだし。
つーかメル、普通に喋ってるけど、おどおどした喋り方は演技だったのか？

「だが、ここで貴様を始末しなければならないのでな！」

「やれるのか、この俺を」

「貴様相手に一人で無策に挑んだりしないさ」

メルは合図を出すと、魔族五百体程呼びだした。

「ふふっ、これだけの数を前にして、その減らず口を叩けるかしら？」
「確かに、一人では苦労するな。だが、「一人だけ」ではな！」
俺は指を鳴らした、そしたら魔族数十匹が消し飛んだ。
「隊長、お待たせしました！」
「隊長殿、御指示を！」
「ほんとにメルちゃんが裏切ってたとはね」
白の騎士団が到着した。
ちなみに上から、シルヴィー、ディバル、バルト。
「なるほど、最初から私を疑っていたという事か」
「メルフィレア・シエル、貴様を逮捕する！」
「メルちゃん悪い事は言わないよ、大人しく投降したら？」
「シエル、一時とはいえ共に隊長殿の下に居たのだ、投降してくれ」
「フフッ、ハハッ、ハハハハハハッ！」
メルは不気味に笑う。
「何が可笑しい！」
シルヴィーが言った。
「だって、この状況でそんなオメデタイ事を言って来たら、可笑しくなるでしょ」
メルが妖しく笑った、後ろの魔族たちも笑っている。

「でもね、もう遅いのよ。魔族共……こいつら全員、始末せよ！」
魔族たちは一斉に白の騎士団に向かって行った。
「来るぞ、全員戦闘準備！」
シルヴィー、バルト、ディバルが戦闘態勢を取った。
そして俺は指示を出す。
「かかれーーー！！」
魔族と白の騎士団の戦闘が始まった。
「なめんなよ魔族、嵐脚・乱！」
「ゆくぞ、指銃・黄蓮！」
「嵐脚・線！指銃・撥！」
「「「ギャアーーーーーー」」」
上から、バルト、ディバル、シルヴィーの六式によって、七割の魔族を倒した。
徐々に焦り始めたメルに対して、テラは驚いてばかりだった。
「すっげ、この短期間の内で教えた六式の派生技まで完璧に扱っているよ」
さてメルの方はどうだろうな、思考読みのギアス発動！
「（なんだあの技は、私は知らないぞ！）」

そりゃそーだろーな、だってあの派生技は、お前の裏切りが発覚してから急遽皆
に教えたんだからな。

「（くっ、テラ以外は楽勝かと思ったら、まさか他の連中がここまで強いとは、正直侮っていた。こうなったら）」

あっこっち向いた

「（せめてテラだけでも！）」

メルは、俺に向かって突進して来た。

「指銃！」
「甘い！」

メルの指銃を指二本で受け止める。

「なっ！？」
「忘れたか、お前にその技を教えたのは私だぞ！」
「くっ、ならば嵐きゃ「遅い！」！？」

嵐脚をくり出す前に防いだ。

「何をしても無駄だ、大人しく投降しろ！」
「私は・・・負けられない、魔族共！」

魔族たちは、俺めがけて一斉に突進して来た。

「はあっ！、せいやっ！、とぅあっ！」

魔族をものともしない俺だった。・・・が、この時メルは

「猛き・・・焔よ！・・・・汝に・・・・触れし者！」

これは、俺の教えた呪文詠唱！？と言う事は、

「・・・全てを・・・滅さん！！」

確かこの魔法は、

「『エクスプローーーードーーー』！！！」

その瞬間、赤い光が上空から降りていき、大爆発を起こした。

俺はとっさに、マグマグの実の能力で全身を溶岩にし、爆発に耐えた。

この時、思考読みのギアスを展開させてメルの心境を盗み聞きしてみる。

「（ハァッ……ハァッ……ハァッ……やっ、やったわ。ハァッ……ハァッ……遂に…ハァッ…テラ…を…ハァッ……ハァッ…倒したわ。ハァッ……ハァッ…しかし、…ハァッ…魔力の、…消費が、…ハァッ…激しい…わね、ハァッ……ハァッ……）」

浮かれてるとこごめんね。

「いや～危ないとこだったな」

「！！！！？？？？」

うわー、凄まじく驚いているよ。

「そ…そんな、全魔力を使っても……倒せないなんて……」
「残念だったな」
「ハッハッ……隊長、遅くなりました！」
「かなりの数で時間かかっちまったぜ」
「隊長殿の方は、片が付いた様ですね」

魔族を打ち倒した白の騎士団が戻ってきた。

「さあメル、年貢の納め時だ」
「くっ・・・」

これで裏切り事件は解決し・・・

「まったく、役立たずめ！」
「「「「「！！？」」」」」

俺は周囲を警戒し、先見のギアスを展開したら、メルの死んだ姿が見えた。

「！！？メル！！そこから逃げろ！！」

俺は、メルを助ける為に駆け出した。だが間に合わず、目の前でメルの背中に剣が
5～6本程突き刺さった。

「グアッッッッッッ！！！？？」
「「「「「メルーーーーーー！！！？」」」」」

俺達は唖然としていた。するとそこに、

「よぉ、お前らが白の騎士団か？俺はザビーネ・ジェラミスだ！」

何だこいつ、ＴＯＶのザギみたいのが来やがった。いやそれよりも、

「メル、しっかりしろ「キュア」、「ケアルガ」、「ホワイトウィンド」！！」

「あっ・・くぁっ・・アぁ・・ウぇ・る・・ん・・く・・ス・・・・さ・・・ま・・・・・・・」

しかし、効果はむなしく終わった。

助けられなかった、見えていたのに、救えなかった。

「貴様、何故……何故メルを殺したぁ！！」

「フン、我ら「完全なる世界」に雑魚はいらん！」

そんなことで、そんなことでメルを殺したのか！？

「貴様は、貴様だけは・・・許さん！！」

「ほう、冷静沈着な極光の騎士も憤りはある様だな」

「シルヴィー！、皆を連れてここから逃げろ！」

「！？隊長、我らもお供ｓ「下がっていろ、この敵は別格だ！」！！？」

俺は、シルヴィーに当たる様に言ってしまった。

「わっ、分かりました。バルト：ディバル、メルを連れて…撤退する。隊長…お気を付けて」

白の騎士団は撤退した。

「賢明な判断だが、本当に一人でこの俺と殺ろうと言うのか？」

「黙れ！」

俺は静かに言った。

「俺は今、お前を殺したくて仕方がない！」

「ほう、あの役立たずを殺したぐらいで殺意が出るとはな」

俺はもう、すぐにでも飛び掛かって殺したい気分になった。

「だが勘違いするなよ、俺の目的はお前の始末じゃなく、勧誘に来たんだ」

「勧誘？」

「ああ、我ら「完全なる世界」にお前も入れと言いに来た」

「ふざけているのか？」

「まぁ、俺は別にどうでもいいけど、あの方がお前を欲しているのでね」

恐らくフェイトの事だろう。だが、

「断る。お前は、俺の目の前で仲間を殺した！」

「仲間ぁ？お前を裏切り、殺そうとした女だぞ、そんな奴が仲間だと？」

「確かにさっきまでは敵だったさ。だが理由はどうであれ、あいつは、メルは、俺達白の騎士団の仲間だ！だから、俺達で彼女を更生させ、騎士団に戻らせようとしたんだ！それを・・・それを！！」

「くっだらねーな」

「くだらない・・・だと！？」

「雑魚は雑魚だろ？片づけて何が悪い？それに、お前みたいな甘い奴は誰も守れねーよ！」

俺はこの時何かが切れた。俺は直ぐに、右手に月のクレイモアの「ルナティック」

（武器名はＫＨＤ参照）と左手に暗黒の鍵剣「カオスリーパー」を作り出し、自身

にシャープネス、バリアーをかけた。

「ん！？なんだこの殺気は！？」

「もう謝ったって許さねーぞ！」

俺は、ルナティックの効果でバーサク状態と、ゴムゴムの能力でギア２を発動させ

体中から蒸気が出た。

「コノ・・・クズヤローーーーーーーーーーーーーー！！！」

「は、速い！？」

俺はザビーネとの戦闘を開始した

「貴様デケハ断ジテ許サーーーーン！」

「ははっ良いぞ良いぞ、久しぶりの殺し合いだ。せめて俺を楽しませてから、死ねーー！！」

「俺ハ楽シム気ナド無イ！アルノハ、貴様ヲ殺ス事ダーー！！」

怒りの心を宿した俺は、がむしゃらにザビーネと戦った。

「魔神剣・双牙！爆砕陣！爪竜連牙斬！蒼破追蓮！裂空刃！」

「ははははははっ、なんて技の連撃だ、良いぞ良いぞ、やっぱ殺し

合いはこうでなくてはな！」

しばらく剣撃が続いていた。

「ウオォォーーーーー！！」

「ハハハハハハハハハ！！」

その後景は、ＦＦの様な戦闘だった。

「ソニックレイヴ！、ラストアルカナム！、ダークインパルス、ストライクレイド（左の方）！、ブレイクスロー（右の方、勝手に命名）！」

武器を投げ切ッた後、最後に放った技で大爆発を起こした。そしてすぐさま、

「『穢れなき風、我に仇なす者を包み込まん！イノセント・シャイン』！！」

「ぐあぁぁぁぁぁーーーーー！！」

清き光がザビーネに降り注ぐ！

「や…やったか？」

「シャァァァーーーー！！」

血だらけのザビーネが、猛進してきた。

「武器の無い貴様に、もう勝ち目は無い。俺の勝ちだぁぁーーーー！」

ザビーネの攻撃を紙絵で避けて、テラは直ぐに首目掛けて蹴り出した。

「首肉(コリエ)！」

「グはぁっ！？」

「俺が甘いだと？」

ザビーネは首元に蹴りを喰らい、後頭部から地面に激突した。ザビーネは起き上がろうとしたら、

「肩肉(エポール)！」

「ヴェっ！？」

「俺が誰も守れないだと？」

テラは、ザビーネの肩を蹴り降ろしながら、先程言われた事について意見のある様に言った。

「背肉(コートレット)！鞍下肉(セル)！胸肉(ポワトリーヌ)！もも肉(ジゴー)！！」

「グァッ、ダァッ、ヴァッ、ガァァッ！」

テラの蹴りの猛攻により、ザビーネはダウン寸前になっていた。

「オノレ……オノレ！ウォーーーーー！！」

ザビーネはテラ目掛けて攻撃しようとしたら、

「ハッ、ド……ドコニ？」

その瞬間、テラの後ろ蹴りが炸裂した。
「羊肉(ムートン)……ショットーーーーーー！！！」
「ムガァーーーーーーーーーーーー！！！」
ザビーネは上空へと空高く吹っ飛ばされた。
「止めだ、アデアーットォ！」
俺は、アーティファクトからWGゼロのツインバスターライフルを取り出した。
「ターゲット……ロックオン！目標を……排除する！」
テラはそう言って、引き金を引いた。
眩しい位の閃光がザビーネを襲う。
「ギャアァァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッッッ！！！？？」
ザビーネは閃光の中に飲み込まれた。
「ハァッ……ハァッ……ハァッ……あっ、アベアット。ハァッ……ハァッ……」
テラはツインバスターライフルをしまった。
「仇は…ハァッ…取ったよ、メル…ハァッ……ハァッ…」
テラは疲労していた。そして、直ぐに皆の所へと戻って行った。

～～～

俺達は外から聞こえた音の方角を見て見ると…何やら市街地で爆発があったようだ。

～～～

「ぐえっ！な、何しやがる姫さん！？」

いきなり襟引っ張るんじゃねぇよ！

「……私も行こう」

「ああ？何言ってやがる、無茶言わねーで戻ってろ！！」

「ここに私を1人残しておく方が危険だと解らぬのか愚か者が。それに私の魔法は役に立つぞ？忘れたか鳥頭」

……確かに、姫さんが言うことも一理ある。何より俺が居るんだ、姫さん一人

くらい守りきってやるぜ！

「ハッ、いいぜ姫さん！ついてきな！！」

～～～

『本日未明、正義の味方を名乗る男が……』
「あれ～たいちょーおは～、なーに見てるんすか？」
「あ、バルトか、おはよう。ニュースを見てたんだよ」
「ニュース？そんなもん見て楽しいんすか？」
「お前なぁ…少しは世の中の情報くらい聞いとけよ」

バルトはいつもの様にめんどくさそうにしてた。
でも、これが流れたって事は、ナギが動き出した様だな。確か原作だと、証拠を手
に入れたら、フェイトに嵌められて指名手配されるんだったな。
それで確かテオも
攫われるんだっけ？だったら、その対処もしとかないと。

裏切り者への粛清と新たなオリ敵（後書き）

マグマグの実・・サカズキの能力だと思って下さい。
一部聞いた事ある部分もあります。
次回
やっとの思いで、紅き翼と共闘した！
長かった、やっとナギ達と戦える。

やっとの思いで、紅き翼と共闘した！（前書き）

駄文が続いています。
それでも続きます。

やっとの思いで、紅き翼と共闘した！

～テラサイド～

今日はテオに呼ばれて部屋に来た。

「おおラウル」

「テオ、今日は何の用だい？」

多分、アリカ姫との接触しに行く事かな。ま、連れて行くなら護衛はばっちりだが、連れて行かない場合は精霊に頼むとしよう。

「うむ、実はの、妾はこれからアリカ姫の所へ行き、和平を試みるのじゃ！」

「なっでは、俺達白の騎士団はその護衛と言う事ですか？」

一応驚いて見ました。

「いや、お主達は留守番してもらう」

「えっ、な…なぜですか？」

やはり驚いて見た。

「お主達帝国最強の騎士団が傍に居ると、和平ではなく武力制圧しに来ると思われるのでな、スマンが残ってくれ」

帝国最強の騎士団は言い過ぎかと思うんだけど、まあそんな理由ならしょうがないな。

「分かった。でも念の為に保険は掛けて置きますね」
「保険？」
「はい、『大いなる暗黒の淵よりいでし者よ！契約者の名において命ず、出でよ！シャドウ』！」
俺はＴＯＳ版のシャドウを召喚した。

『主・・・何用カ・・・？』
「な…なんじゃ！？この……気味の悪いのは！？」
「こいつの名はシャドウ、闇の精霊だ！」
「こ・これが精霊！？それにしても事務的で変じゃのぅ」
『主・・・我ハ・・・？』
「ああ、テオの影の中に入ってくれ。何かあったら俺に報告に来てくれ」
『ショウ・・チ・・』
「わ…妾の影に入るって、ヒッ…気味が悪いのじゃ」
「そう言うなよテオ、シャドウはこういう奴なんだから」
「う～～～～、分かったのじゃ」

テオは観念して自分の影の中に、シャドウを入れた。
それからしばらくして、

「ではなラウル、行って来るのじゃ」
「頑張ってね、テオ」

さてと、こっちも準備しとくか。

～～～～

それからガトウがその証拠を見つけたという事をマクギル元老院議員へ連絡を入れると、ナギ達と共にその証拠の品を持って来てくれと言われ、俺とラカンも一緒に行く事になった。
因みにアリカ姫はその前に帝国第三皇女と接触しに行くことになり、既に出発していた。
ただ、去り際に俺の両頬にビンタして来た…何でだ？
とりあえず俺達はマクギル議員の所に向かったんだけど…何故か俺は嫌な予感がした…

「マクギル元老院議員」
「御苦労、証拠品はオリジナルだろうね？」
「ハ…法務官はまだいらっしゃいませんか？」
「……法務官は……来られぬ事となった」
「……ハ…？」

ん？なんか違和感が？

「…あれから少し考えたのだがね。せっかくの勝ち戦だ、ここにきて…慌てて水を差すのもどうかと思ってね」
「ハァ」
「……」

へっ、そういう事か！

「いや……その、私の意見ではない。そう考える者も多いという事だ。時期が悪い、時を待つのだ。君達も無念だろうが、今回は手を引いてだな……」
「待ちな」
「？」

「あんた、マクギル議員じゃねぇな。何もんだ？」
そう言い、ナギはマクギル元老院議員（偽）を燃やした。
「ぶ！？」
「「な……」」
ラカンとガトウはナギの奇行を見て、驚きの声を上げた。
「ちょーーーーっ！？　ナギおまっ……何やってんだよッ！？元老院議員の頭をいきなり燃やしておまっ」
「ばーーか。よく見てみな、おっさん」
「「何っ……」」
彼等の視線の先の炎の中から現れたのはマクギル元老院議員ではなく……少年だった。
ナギとそんなに変わらない様に見えるが纏っている雰囲気が全く違う。
「……よく分かったね、千の呪文の男。……こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要なようだ。本物のマクギル元老院議員は残念ながら、既にメガロ湾の底だよ」
「てめぇっ」
俺は思わず、議員に化けた優男目掛けて突っ走った。だが、
「通しませんよ」
「くらえ」
「！？」

突然現れた二人組に驚き、足を止めた。ナギは前方に障壁を展開した。その障壁に衝突する様に強力な火系魔法と水系魔法が放たれた。

「それよりも強ぇぞ、やつら！」

「ハッハ、だが生身の敵だ。政治家だ何だと、ガチ勝負できない敵に比べりゃ……万倍！！！戦いやすいぜ！！」

ラカンの言葉に呆れながら溜息を漏らすナギ。

「フ……」

少年はそんなナギ達に不適に微笑んで通信機のようなものを取り出した。

「わ、わしだ！マクギル議員だ……うむ、反逆者だッ！……ああ。うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むッ。スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーク、奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！今も狙われている、軍に連絡をッ……」

「げ」

「やられたな」

少年は紅き翼が帝国のスパイだという偽情報を流した事に対して、彼等はそれぞれ感想を漏らした。

「「おおおっ！」」

こうなりゃあいつらだけでも、とナギとラカンが突進して行った。

「……君達は少しやりすぎだよ。悪いが退場してもらおう」

その後、今まで味方だった奴ら相手に暴れる訳にはいかなかった。
何とか海へと脱出した俺達であった。

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。ヌッフフ…いいねぇ、人生は波乱万丈でなくっちゃな！」
「タカミチ君たちは脱出できたかな？」

ラカンの奴、呑気な事言ってんじゃねぇ。
そんな事よりも、

「……姫さんがやべぇな」

～～～

それで俺は、目の前に地図を見せる。

「……場所は此処だ、「夜の迷宮」と呼ばれる遺跡に幽閉されている事が判明した！」

「では、直ぐに救出に向かわねば！」

「待てシルヴィー、いいか…この事はまだ知られていない事なんだ。他の者にこの事を見せても、受け取って貰えないかも知れない」

「な、では姫様は放っておけと！？」

「そうは言っていない…俺達が勝手に向かうという事は、帝国の騎士として命令に反するという事だ！」

「くっ」

「それじゃーどうしようもないじゃないか！？」

「隊長殿、我々はどうすれば？」

皆が悩んでいる所すまないが、もう決めていた事だ。

「だから、俺一人で行く！」

「「「なっ！！？？？」」」

案の定、皆驚いているな。

「何故御一人で行かれるのですか！？」

「帝国の騎士であるお前達には迷惑をかけたくない、それに俺は」

一呼吸した後、

「俺は帝国の騎士じゃない！テオの騎士だ！！」

「「「！！！」」」

「だから、俺が必ず……テオを……テオドラ皇女を救い出す！！」

部屋が静かになる。

「皆にはすまないと思っている、だかｒ「隊長！！」！？」

シルヴィーが言った。

「隊長！我々は隊長の部下です。隊長が行くべき所は我々も一緒です！！」

うっ、結構感動しちゃったけど、

「だっだが、「シルヴィーちゃんの言うとおりだぜ隊長」バルト！？」

「私も、副隊長殿の意見に賛成です。我らもお供致します！」

「お前達……分かった。俺は良い部下を、いや良い仲間を持って幸せだ」

これはもう、素直な気持ちです。純粋に嬉しさで心が一杯です。

「ここからは帝国の命令違反となる、それでも俺に付いて来るか？」

「もちろんです！」

「ったり前さ！」

「一緒に姫様を御救いしましょう！」

こうして白の騎士団は空を飛んで、夜の迷宮へと向かって行った。

ちなみに、俺はガイアベインをキーブレードライド形態にし、残りの皆は俺のアーティファクトで皆の前に空飛ぶボードを置いた（エウレカセブンのリフボード、どんなに体制悪くても乗りこなせる様にした）。

後、シルヴィーにはニルヴァーシュのボード、バルトにはジ・エンドのボード、ディバルにはデビルフィッシュのボードをモデルにしました。
しばらく飛んでいると、夜の迷宮が見えてきた。だが、既に先客が居た。

「ん？…な！？あれは紅き翼ではないか！？何故奴らが此処に！？」
「詮索は後だ、とにかく突っ込むぞ！」
「「「了解！」」」

紅き翼の方もアリカ姫を救出に来たんだな。

～～～

俺も愚痴を言っていた。その時

「ナギ危ない！」

「！？」

一体が俺目掛けて攻撃しようとした瞬間、

「『火拳』！！」

俺を襲う筈だった者は、業火に呑まれて炭となっていた。

俺は、炎が来た方へと向くと、変な乗り物に乗ったテラがいた。

「大丈夫か？ナギ・スプリングフィールド」

「テラ！？何でお前らが此処に？」

「我々はテオ…テオドラ皇女を救出する為に来た！」

テオドラ姫を！？姫さんと一緒に攫われたのか？それはともかくとして

「お前らもか！？」

「お前らも、とは？」

「俺達はアリカ姫を救出する為に来たんだ！」

「なるほど、だからお前達もここに来ていたという事か」

テラとは因縁があるが、今は姫さんだ。

「「「隊長」」」

「「「「ナギ」」」」

紅き翼と白の騎士団が合流して、互いの情報を交換した。

「つー訳で、紅き翼と白の騎士団初の共同戦線と行くぞ！！」
「「「

そして、紅き翼の秘密基地のあるオリンポス山へ向かった。

〜〜〜

テキトー過ぎる説明をするラカンの前にアルビレオがやってきた。
「私達はジャックの言う通り、疑わしい執務官の弾劾裁判を開こうとしたんですが……悔しいことに完全なる世界に先手を打たれまして。それで一夜で一転、私達は英雄から反逆者。と言う訳なんですよ」
「うへぇ、なるほど……お前さんらも結構苦労してんだな」
バルトが同情する。
ん、向こうでナギとアリカ姫が今後の事を話しているな。
はっ、これってあの有名なシーンが見られるのかも、
〜〜〜

ったら俺は魔法使いだぜ？」

しかも恥ずかし―し。

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ならば主はもはや私の物じゃ」

「なッ…」

どうゆう理屈だよ。

「連合に帝国……そして我がオスティア……世界全てが我らの敵という訳じゃな？じゃが…、主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ？」

後ろの方でジャックが、「ん？ムテキ？」と自分に対して言われたと思っている。

「世界すべてが敵――良いではないか。こちらの兵はたった7人……だが最強の7人じゃ、ならば我らが世界を救おう。我が騎士、ナギよ　。我が盾となり、剣となれ」

だから、俺は魔法使いだっつーのに……とナギは思った。

「……へ、やれやれ……相変わらずおっかねぇ姫さんだぜ。いいぜ！！俺の杖と翼！！あんたに預けよう！！」

アリカ王女が腰から黄金の剣を抜く。その剣をナギは受け取り、右肩に掲げた。

～～～

ナギの誓いのシーンを生で見れるとはな。
でも、俺達空気になっている気がする。つか忘れてない？
いつまでもここで突っ立っている訳にもいかず、俺はテオにある決意を言おうとするが、

「のう、アリカよ。妾の騎士達の事も忘れないで欲しいのぅ？」

思わぬ助け船を出したテオ、俺は直ぐに、

「うむ、話を聞いてしまった以上、このまま放っておく訳にはいかない！」

テオと俺がそう言うと、アリカ王女は驚いた顔をした。

「だ、だが主らはテオドラを助け出したのだから、もう私達に協力する義理はないじゃろう？」

困惑気味なアリカ姫。

「あのねお姫様、俺達だって相当の修羅場を潜り抜けて来たんだぜ！」
「例え帝国の意思に反していおうとも、我らはただ戦うのみ！」
「「完全なる世界」は我ら共通の敵、共に打倒しようぞ！」

バルト、ディバル、シルヴィーが紅き翼に対して、協力しようとしている。

「我ら白の騎士団は、貴君等紅き翼と共に、世界を救おうぞ！」

俺は、高らかに宣言した。

「妾の騎士達もこう言っておる。妾達も世界を救う為、紅き翼に協力しようぞ！」

「すまぬなテオドラよ、そして白の騎士団よ」

アリカ姫は感謝の言葉を言った。

それから、白の騎士団の今後の方針を決めていた。

「テオ、私はこれから紅き翼と行動を共にします」

「うむ、分かったのじゃ」

「シルヴィー達は帝国に戻り、内部に敵が潜んでいるならそれの排除、そして紅き翼の味方を増やしてほしい」

「「「了解！」」」

テオと白の騎士団は帝国へと帰って行った。

そして俺は、

「紅き翼よ、そしてアリカ姫よ……」

鎧を消し、ラフな格好のラウルになった。

この時は一同、驚いた顔をしていた。

「我が真名、ラウル・クルセイドの名に懸けて、あなた達と共に闘う事を此処に誓う！」

周りは静かになっていた。そして最初に質問して来たのはアルだった。

「まさかテラが、女性騎士だったとは！？」

ずっこけそうになった、なんで女性騎士だよアル。

「俺は女相手に苦戦したのかよ」

おいラカン、お前もか！？

「……可憐だ」

ちょっ詠春！？

「綺麗な人だなぁ」

そこのタカミチ少年、違うから、

「帝国最強の騎士が女性とはな」

あんたもかオッサン、

「……（哀れじゃのう）」

ギアスで皆の思考を聞いてたら、ゼクトだけだよ気づいてくれたのは

「（いやはや冗談で言ったら、皆すっかり信じてますね）」

一応アルも気付いていたが、どうやらふざけていたようだ。

「ま、男だろうと女だろうと、いつか決着付けてやるからな」

ナギまで……

「お前らな……俺は……俺は、男だーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

ラウルの怒りが爆発した。

やっとの思いで、紅き翼と共闘した！（後書き）

ラウルと紅き翼が手を組み、いよいよクライマックスへと突入……
の前に、
次回
「外伝2紅き翼と親睦深めます・ラウルの過去（嘘）を教えます」
ちょっとしたネタです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7063o/

ネギま！　魔法先生ネギま！～最強無敵のチート降臨～

2010年11月21日07時16分発行